

最上川大石田河岸の「みなと文化」

小山 義雄

目 次

第1章 大石田河岸の整備と利用の沿革	14-1
1. 古代の舟運	14-1
(1) 百姓「丸太舟」で酒田湊と交易	14-1
(2) 古代の水駅「野後」—推定地大石田駒籠地内	14-1
2. 「伝承」に語られる中世の舟運	14-1
3. 近世 大石田河岸の全盛期	14-2
(1) 最上川の「通船定法」に基づく舟運の開始	14-2
(2) 河岸の整備と町づくり	14-3
(3) 出羽三山参詣導者の乗船湊としての大石田河岸	14-4
4. 鉄道開通で衰退する明治・大正の舟運とその終焉	14-4
5. 昭和・平成期 地主の町としての盛衰	14-5
第2章 「みなと文化」の要素別概要	14-6
1. 船道安全のための祈願寺社の創建と船絵馬の奉納	14-6
(1) 大石山水路院乗船寺	14-6
(2) 川船役所の船守神社	14-6
(3) 川端の金刀比羅神社	14-6
(4) 黒滝山小楯の金刀比羅神社	14-6
(5) 横山村本郷西方の船橋神社	14-7
(6) 石仏「象頭山」	14-7
(7) 船絵馬群	14-7
2. 河岸町の文化的景観	14-7
(1) 船積荷問屋と荷蔵	14-7
(2) 幕府直差配の「川船方役所」	14-8
(3) 川船大工の町	14-8
3. 交易物品における舟運文化	14-8
(1) 下し荷物	14-8
(2) 上せ荷物	14-9
(3) 京・大坂・江戸方面との交易と交流文化	14-9
(4) 最上川に誘われ、大石田を訪れた文人墨客	14-10
(5) 地元俳人と全国俳人たちとの交流	14-12
第3章 「みなと文化」の保存と振興に関する地域の動き	14-13
1. 雛人形と雛祭りの復活	14-13
2. 「大石田河岸絵図」に表現された集落跡の保存	14-13
3. 最上川景観の保存	14-14
4. 最上川や街並みを鳥瞰した絵図の保存	14-14
(1) 「最上川通船案内書（卷子）」	14-14
(2) 紙本著色「大石田河岸絵図」江戸後期	14-15

所在地：山形県大石田町

港の種類：河川港

港格：—



【位置図】



【現況写真】(大石田町「おおいしだものがたり」より)

第1章 大石田河岸の整備と利用の沿革

1. 古代の舟運

(1) 百姓「丸太舟」で酒田湊と交易

「往昔、最上川ニハ河岸トイウトコロモ無之、酒田湊へ百姓直納ニテ、^{ヒラタフネ}艦船ト言モ最上ニハ無之、丸太舟ニテ其限り納侯様承候、」『大石田町誌 史料編』

やはり、大石田近辺でも丸太舟を用いて、百姓自ら酒田方面との交易活動を行っていたといえる。勿論この当時は河岸場というものもなく、生活の必要上自由に自然経済的な舟運として行われていたものと思われるが大石田河岸はまだ定かでない。

(2) 古代の水駅「野後」^{のじり}—推定地大石田駒籠地内

延長5年（927）に軍用及び公用道路として利用するため、最上川に水駅が設けられた。延喜年間に制定された法律「延喜式」及び軍事関係の施行細則「兵部式」の「諸国駅伝馬条」によると、野後の水駅には五駅馬10疋・伝馬3疋・船5艘を配備したとされている。

この古代水駅は全国でも出羽国だけに残るものとされ、歴史的価値は極めて高い。

大石田町と山形県では、野後水駅確認のため推定地の発掘を行っている。廂をもった格式の高い二棟の建造物の遺構と水駅と同時代である平安時代の須恵器、土師器などの遺物が確認され、古代水駅の地としての信憑性が高まったと期待されている。

さらに、駒籠は野尻川との合流するところに位置し、舟の便に供する地点であること、それに「駒籠」という地名が重要な意味を持つと考える。即ち、駒籠は駅家にはなくてはならない馬の駐屯地を意味する馬込(まごめ)の遺名であると捉える（『尾花沢市史 上巻』）。

最上川に野後の水駅の置かれた当時の大石田河岸はどうなっていたものかは分らない。

2. 「伝承」に語られる中世の舟運

中世の舟運については、空白の時代と言われ、組織的にどのように行われていたのかはつきりとは分らない。物語や伝説のなかに少しく示唆するものを読み取る程度である。

順徳上皇は後鳥羽天皇の皇子とされ、兄の土御門天皇の後を継ぎ、84代天皇に即位する。承久3年（1221）、父の後鳥羽上皇が鎌倉幕府の横暴な振る舞いを阻止し、朝廷の復権を図るために企てた「承久の乱」が起こる。いわゆる朝廷対幕府の争いである。順徳上皇は中恭天皇に譲位し、父と共に倒幕に参戦したが朝廷側は敗れる。順徳上皇は佐渡へ流罪となり、仁治2年（1242）、46歳で崩御されたという（『国史大辞典』）。

しかし、大石田には、順徳上皇は佐渡から逃げてきたという伝説がある。出羽国の小田島庄（東根）に住む豪族、阿部孫一の次男に、勤皇精神が強く文武に優れた阿部常次郎頼時という人物がいる。時に上皇が佐渡に流されたことを知った頼時は、危険を顧みず日本海に船出して佐渡島へ渡り、島から上皇を救いだす。酒田湊を目指して最上川河口に着く。

さらに、舟で最上川をさかのぼり、大石田の深堀に上陸したという。その上陸したとされる地点には御前清水があり、一時仮宮居跡とされる所に御前神社が祀られている（「順徳上皇上陸の地」一御前神社堂主 芳賀万吉家の伝承）。

古代の最上川水駅と併せて考えれば、中世当時も、舟の往来は頻繁に行われていたことは容易に想像されるが、大石田河岸がどうなっていたかは分らない。

3. 近世 大石田河岸の全盛期

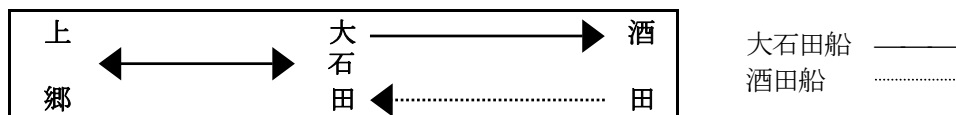
（1）最上川の「通船定法」に基づく舟運の開始

最上川が、運行仕法（きまり）に基づいて、秩序だてて定期的に物資を運び、人々が往来する道として本格的利用が開始されるのは近世以降のことである。出羽国に幕府領が成立するのは、元和8年（1622）山形藩最上氏が改易され、山形城に鳥居氏、上山城に松平氏、鶴岡城に酒井氏、真室城に戸沢氏が入部した時からである。

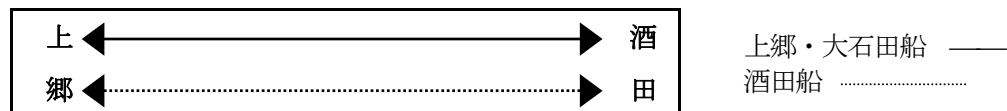
山形の城主は幕末最後の水野忠弘まで13家が代わる。その度毎に藩の領地が減らされ、減らされた分だけ幕府の領地が増えていく。幕府領の城米はその分だけ年々増加し、多い時には22万俵余にも及んだ。城米は江戸や大坂に送ることが義務付けられ、その輸送路を確保することを最大の要因として最上川舟運が発展していく。

とりわけ大石田は上下運送の中継河岸としての権限を預かって以来、最上川の中核河岸としての機能を果たしていく。その運送方法の変遷は次の通りである（『大石田町史 上巻』）。

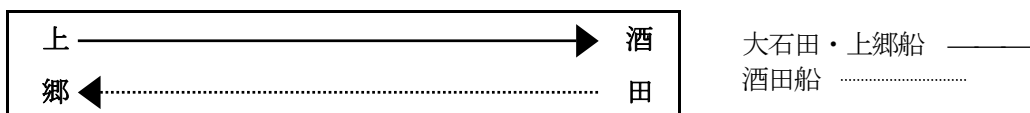
①大石田中継運送（古法）：享保7年（1722）以前—大石田独占請負差配



②上下入会運送（新法）：享保8年～延享3年（1746）—上郷・酒田連合差配

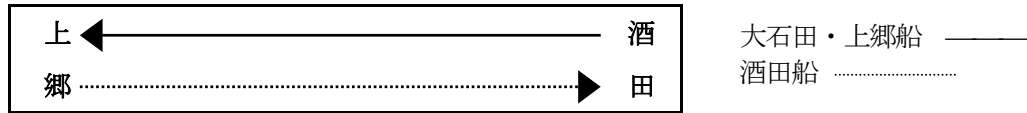


③片運送（新法改正）：延享4年～寛政3年（1791）—上郷・大石田連合差配



以上、冥加金の入札による年季請負制で行われてきた。冥加金は入札度毎に跳ね上がり、船持の利益が圧迫され、潰れ船、休み船が続出し、船数が激減して、城米運送にも事欠く事態に陥り、幕府が直接差配にのり出すことになる。民営から官営への移行である。

④片運送（新法再改正）：寛政4年～明治5年（1872）－幕府の直差配



大石田には幕府直轄（尾花沢代官の管轄）の川船役所が設けられ、明治5年まで存続する。いずれの時においても大石田の舟持衆は、舟運の中核にあって差配をしていた。

（2）河岸の整備と町づくり

①三難所の開削

上郷（大石田の上流部）から大石田までの航路には、大小いくつもの難所がある。とりわけ船頭たちに恐れられていたのは、碁点・三ヶ瀬・隼の三難所である。碁点は碁石を並べたように岩が突起し、三ヶ瀬は大淀狭窄部として約17kmにわたり固い岩盤が川面に突き出し、三ヶ瀬から隼の間はU字型にヘアピンカーブを画く極端な蛇行流域である。加えて急流であるから、難破船の常習地帯とされていた。延享4年と宝暦2年の僅か2年の間に、44艘の難破船があったと記されるどころである。

天正9年（1581）、最上義光が他国から石工を雇い入れ、3～4夏をかけて川底の岩石を切らせ、難所開削を行い、船道を造ったとされる（『北村山郡史 上巻』「願行寺文書」天童）。慶長11年（1606）、斎藤伊予守が奉行となって同様の開削を行ったともある（同「阿部三右衛門家日記」船町）。関ヶ原戦の行賞により57万石の大大名になった最上義光は、庄内から秋田仙北までの領国を形成する。領国支配上からも、山形から酒田までの一貫通船は悲願であった。

②河岸場の「町づくり」と連絡道路「へぐり道づくり」

「天正8年、最上義光は舟往還の大石田河岸の村立てをした」（同「願行寺文書」天童）とある。河岸場に相応しい町を計画的に造ったか、または町改造を行ったということである。

「大石田河岸絵図」や現在の街並みから推測して以下のようなことが考えられる。

- ・川面に沿って平行に河岸道路、街並み道路を、それに直行する荷揚げ道路を造る。
- ・河岸道路には荷蔵を重点に、街並み道路の中心部には船積荷問屋を配する。
- ・川端地区には船大工、街の両尻の方には船頭ほか舟運労働者の居宅を置く。
- ・船路安全祈願所を勧請し、寺社を創建する（大石山水路院乗船寺等他）。

最上義光はさらに、河岸場に通じる連絡道路の整備にも着手している。

「中仙道（後の羽州街道か）の街道に土生田村を割り出す。同時に今宿山の東側の岩石を切らせ、大石田村への通路を開いた。世間ではへぐりと言っている」（同「願行寺文書」天童）。

山形方面からの荷物の運搬道路の整備として土生田村を興し、そこから大石田河岸へ通じるへぐり道（川辺の崖道）を造り、連絡道路を開いたとある。

船道の開削、河岸場の町づくり、連絡道路の建設をセットにした大開発構想の姿が見え

てくる。最上義光の時代を大きな転機として、舟運および河岸は画期的に発展していく。

（3）出羽三山参詣導者の乗船湊としての大石田河岸

大石田は舟運物資の集散地であったばかりでなく、出羽三山参詣のための乗船基地でもあった。導者宿三軒、導者舟10艘、小舟数艘を揃え、町直営で導者のための旅行業を行っていた。収益金は町財政の収入源とし、その用途は多方面にわたっている。毎年、町の名主や組頭が取締役となり、「導者宿賄定法」「導者定法」等を定め、導者に対応している。元禄10年（1697）は出羽三山縁年の丑年に当たり、大石田経由の導者は17,764人を数えたという（『大石田町史 上巻』）。

大石田から乗船する導者のコースについて、その2～3例を拾って見ると以下の通りである。

①文政12年（1829）一行不明

仙台—山寺（泊）—天童—大石田泊（乗船）—仙人堂（泊）—清川（下船）—羽黒山（泊）—月山（泊）—湯殿山—志津—本道寺（泊）—大沼—山形

②天保12年（1841）（茨城）水戸：深作平右衛門一行

軽井沢峠—銀山温泉—（大石田乗船）—清川下船—羽黒山—月山—湯殿山

③文久元年（1861）7月（宮城）黒川郡大郷町：齋兵衛一行18名

軽井沢峠—銀山温泉—尾花沢—大石田（乗船）—烏川（下船）—肘折—月山

④年月不詳（神奈川）横浜：中野権作衛門一行25名

榎下—天童—尾花沢—（大石田乗船）—清川下船—羽黒山—月山—湯殿山

（『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』山形大学教授 岩鼻通明著）

このような事例は他にも数多くある。関東方面から太平洋側を北上し、出羽最上街道の軽井沢峠を越えて大石田に、あるいは二口峠（山寺）や金山峠（榎下）から羽州街道を通り、大石田から乗船して三山に向かう、謂わば乗船基地の役割をもつ河岸でもあった。

4. 鉄道開通で衰退する明治・大正の舟運とその終焉

明治4年には年貢米の金納が許され、貢米の川下げ量は激減する。さらに、最上川舟運が自由通船化されるのは明治5年である。当然幕府直差配の統括をしてきた川船役所も廃止され、「通船定法」に基づく舟運は終わり、最上川は自由航行になる。

明治12年、舟運の調査統計によると、米14,000俵、大豆180俵、小豆370俵、小麦270俵、菜種1,300俵、藍650箇、青苧1,150箇、紅花14箇、煙草1,700箇など総計35,000余品目となっており、盛時と比べれば少ないが、まだまだ舟運の役割は大きい。注目されるのは、米と紅花は著しく減少しているが、生活の変化に対応して、品目の種類が頗る増えていることである（『大石田町誌』）。

明治初期の大石田河岸集落は、江戸後期の集落形態をそのまま継承している。新町から四日町までの表道路に面した家業、および川端町の家業を見ると、船乗、船持、廻船間屋、船大工、舟楔鍛冶、舟宿、舟差等舟運に関係していた家が27軒存在していた。職業も継承していることから、明治初期は充分最上川舟運が行われていたことが分かる（『最上川水運の大石田河岸集落と職人』東北工業大学助教授 高橋恒夫著）。

後期の明治34年は大石田河岸の集落にとって、転機となる二つの大事業が完成した年で

ある。

一つは対岸の横山へ、初めて木造大橋がかけられ、もう一つは奥羽本線が大石田まで延長され、その駅に通じる道路が開通したことである。同36年には新庄まで開通し、大正3年には陸羽西線が酒田まで全線開通することによって、最上川の舟運は間もなく終焉する。細々と個人的に営業をする程度になってくる。

5. 昭和・平成期. 地主の町としての盛衰

大石田には、最上川舟運を背景に成長した荷宿・船持商人が多くいた。最上川が輸送路としての役割が終わると、今度は荷宿・船持商人たちは地主経営に切り替え、土地集積に乗り出す。舟運従事者は大工・左官などに転業した。明治18年には地価金1万円以上の地主が4名、同23年にはじまる貴族院多額納税者互選者15名中2名が大石田出身者であった。同29年の所得耕地反別は、渡辺喜助527町歩、佐藤茂兵衛461町歩など多くの大地主が現われ、地主の町といわれるようになる。

その地主たちが、小鵜飼舟を持ち、酒田方面と肥料・五十集物・米雑穀などの取引を細々と個人的に営業しているものもいた。昭和20年、第一次農地改革の実施によって「地主の町大石田」も姿を消し、大きく変貌して現在に至っている（『大石町町史 下巻』）。

かつて舟運の河岸町として名声をはくしたが、やがて最上川水害の町との汚名を着せられるようになり「水害の無い町づくり」が標榜され、昭和40年から14年の歳月をかけて、かつて大石田・横山河岸場であったところに、約2kmの近代的な護岸特殊堤防が整備され、水害からは解放されたが、反面昔の河岸の面影は消え失せた。



【大石田河岸場にできた護岸特殊堤防】
(写真提供 国土交通省新庄河川事務所)

第2章 「みなと文化」の要素別概要

1. 船道安全のための祈願寺社の創建と船絵馬の奉納

(1) 大石山水路院乗船寺

山形城主最上義光は領国経営上、山形と酒田間の一貫通船の必要に迫られる。そのために三難所の直下にある大石田に中継河岸をつくり、内陸部流通の拠点とした。同時に船道水路の安全祈願寺を建てた。大石山水路院乗船寺の名がそれを物語る。義光は家臣大葉内記を大檀那として、慶長元年（1596）、岩城の明蓮社光誉運問上人を招き開山した。



【大石山水路院乗船寺】

(2) 川船役所の船守神社

寛政4年（1792）に創建された川船役所には、嘉永4年（1851）まで守護神がなかった。役所手代の常世田美和助が、船方総代の須藤久太郎に船守神社の勧請を命じた。久太郎は京都の神祇管領長上家へ願書を提出した。長上家から許可状と御神体船守神が下付された。本殿・拝殿・鳥居・石灯籠など地元の職人によって完成され、同年9月晦日遷宮式が行われた（『大石田町史 上巻』東町細矢家文書）。

(3) 川端の金刀比羅神社

口伝によると、最上川三難所の一つ碁点の川底に光る石があり、それを拾い上げると大石田に留まりたいというので川端に祀ったという。御神体は石（「象頭山」と陰刻）である（『大石田町史 上巻』）。

「大石田河岸絵図」によれば、最上川と臈気川の合流する突端にあり、上下する舟々を直に見守る位置に建てられてあったが、昭和35年の堤防工事の際に現在地に移された。

(4) 黒滝山小楯の金刀比羅神社

曹洞宗中本山向川寺の存在する黒滝山の小楯に登ると、最上川の黒滝の瀬と言われているところが眼下に迫ってくる。その当を得た地点に船中安全の神として、二丁目の船持柴田健

助が寄進建築した。現在、倒壊して神社はなくなった。

（５）横山村本郷西方の船橋神社

船橋神社の祭神は船渡神とされ、船道関係者の信仰を集めた。

享保8年（1723）、舟運改革後新たに川船差配役になった漆山村小暮七左衛門・成生村奥山九郎兵衛らは、船道安全と事業の成功を祈願して次の願文を奉納している。

「念願成就仕候ハハ、石塔一体奉納候。次ニ、年々御穀代トシテ白米壺斗、御造酒四十盃壺樽、九月十九日ニ一生ノ間差上可申候」（『北村山郡史 上巻』宮川家文書）。

（６）石仏「象頭山」

象頭山とは、四国の金刀比羅宮のことで、海運・舟運安全の神として崇敬を集めた。

横山熊野神社境内の「象頭山」碑は、建立は横山村船持大内倉之助、文政9年（1826）8月である。上宿稲荷神社境内の「金刀比羅大権現」碑は、建立は庄屋寺崎吉五郎、新庄藩横山陣屋役人柿崎喜内・下田健治である。井出八幡神社境内にも「象頭山」碑がある。

（７）船絵馬群

大石田の神社には12点の船絵馬が奉納されている。その内、川端の金刀比羅神社には6点、ともに海船北前船の意匠である。「酒田利右衛門小路」、「東村山郡明治」などの揮毫がある。大石田観音堂には「大坂西道頓堀住吉橋北詰西」の「北国積問屋吉村清次郎」の奉納した西洋帆船絵馬がある。この他、船絵馬を奉じた寺社に小菅の熊野神社、岩ヶ袋の熊野神社、大浦の薬師神社がある。いずれも北前船の意匠の絵馬で、奉納者の住所氏名、持船の船名・船印が記されている。明治期のものがほとんどである（『大石田町史 上巻』）。

2. 河岸町の文化的景観

（１）船積荷問屋と荷蔵

最上川舟運の荷物取扱業者は、船積荷問屋として株仲間を結成して独占的に行っていた。天保7年（1876）には天保の改革により仲間を16名から34名に増やしている（『大石田町史 上巻』）。

荷問屋は、船荷の保管場所としての荷蔵を持ち、その荷蔵が最上川辺に軒を並べていた。

これが大石田河岸の文化的景観の一つをなしていた。



【安政2年『東講商人鑑』大石田河岸商人】
（大石田町立歴史民俗資料館蔵）

（２）幕府直差配の「川船方役所」

大石田は元禄16年（1703）、艀船292艘を有し、酒田と共に二大勢力を誇っていた。それが宝暦11年（1761）には120艘にまで減少し、その後も減り続け、100艘を割るほどに減船し、幕府の城米輸送にもこと欠く事態に陥る。危機を感じた幕府は、最上川舟運を円滑に行う必要から政策を転換する。即ち、今まで行っていた民間の冥加金入札請負制を改め、寛政4年（1792）、幕府の直差配制のもとで取り仕切ることとし、その元締めとなる「川船方役所」を大石田に設置した。幕府からの御下金22両、惣船持の拠出金98両、その他合計127両をもって川船方役所および付属施設の船会所等を建設した。費用を拠出した惣船持は船町から清水まで60名、26カ村に及ぶ。その内大石田だけで20名と群を抜いている（『大石田町立歴史民俗資料館史料集第九集』）。



【川船方役所跡地の現在の様子】

（３）川船大工の町

船大工は、大石田河岸および最上川舟運の根底を支える役割を背負っている。江戸後期から明治初期にかけて、舟大工、舟鍛冶など舟運に直接関係していた家が27軒あった。

その内、最上川と最も接点となる川端地区には15軒の舟大工が集中的に存在し、船主や船頭の利便を図っていた（『最上川水運の大石田河岸集落と職人』前掲）。しかし、現在は、その役割が完全に終了してしまい、以前の職業の継承者はいない。

そんな中、県下で唯一その伝統を守っているのが黒滝村の船大工第6代目の木村雄一さんである。木村家ももともと川端地区の有路文七舟大工の弟子から出発している。父であり師匠である木村成雄さんには、昭和49年（1974）、労働大臣から卓越した技能保持者として「卓越技能章」が贈られている。

3. 交易物品における舟運文化

（１）下し荷物

大石田川船方役所において、役永（税）を取り立てる出荷移出品目は14種ある。

青苧・紅花・煙草・刻煙草・水油・胡麻・荏・真綿・布・紬・蠟漆・干粉・鳥・絹糸で

ある。それらの農産品の中で特に注目を引くのが最も高価な紅花である。最上紅花は全国生産の40%を占め、出荷高はよく最上紅1,000駄といわれた。出荷高の多かった年は、宝暦2年（1752）の1,200駄、寛政12年（1800）の1,400駄である。少ない年は500駄を下まわることがしばしばであった（『山形県の歴史』、『大町念仏講帳』）。

最上紅は品質が特に優れた紅の染料で、江戸では多くの口紅に製されたが、京都では京染めの染料として西陣を支え、大量に消費された。紅花1駄は米100俵に値すると言われた。従って、紅花の移出には特段の注意がはられ、最上川の三難所を避けるために、羽州街道を大石田まで陸送し、大石田河岸から船積みして酒田港へと運んだ。

青苧は奈良晒や越後縮・近江麻布など特殊な織物の原料としての需要が多かった。米沢藩では御用商人の専売制であったが、村山地方では自由販売であったので、多くの商人がその取扱い業者として活躍した。

（2）上せ荷物

上せ荷の大半は酒田湊を通過した移入品である。慶安3年（1650）、米沢藩の課税品として「茶・古手・塩・木綿・五十集物・瀬戸物・小間物」等上方物産となっている。

酒田から大石田・上郷への上せ荷の中に、様々な櫃物がある。例えば、酒田の鑑谷家文書によれば、薬種櫃・から傘櫃・扇子櫃・墨入櫃・膳椀櫃・人形櫃など小間物の中に含まれ、その中で現在脚光を浴びているのが雛人形で、各地で雛まつりが行われている。

（3）京・大坂・江戸方面との交易と交流文化

①寺社文化

ア. 梵鐘（昭和17年 金属回収山形事務所作成「供出梵鐘名簿」より）

- ・浄願寺 越後国高田 藤原宅次作 正徳元年（1711）
- ・乗船寺 京都三条 藤原国次作 宝永7年（1710）
- ・曹原院 大坂 藤原清次 安永9年（1780）
- ・高松院 本庄 北原金左御門 貞享3年（1685）

イ. 仏像

- ・西光寺の唐金地蔵菩薩像 享保6年（1721）
奉納 江戸大門通亀井町の最上屋喜兵衛 鋳物師は江戸の田村丹波政富
- ・乗船寺の釈迦涅槃像 寛文7年（1667）、木食上人寄進 製造は京都
- ・同寺 千手観音立像 鎌倉時代末期の作（県指定文化財）
奉納 戸田安右衛門近江よりの持仏

（町報「大石田の文化財」）

ウ. 仏石

- ・西光寺と乗船寺の六字名号「南無阿弥陀仏」の塔石 大坂から取り寄せた石
建立 享保4年（1719）奉納 乗船寺14世 良智上人

（「大石田惣町覚書」）



【乗船寺の釈迦涅槃像】

②山車祭り「大石田観音祭礼」

山車祭りは全国的に見られるが、その源は京都の八坂神社の祇園山鉦とされる。大石田観音祭礼にも、祭りに引き出される屋台は山・笠鉦・人形・草木花などで飾られた華麗なものであった。大石田四か村の名主・組頭・有力な舟持荷問屋が屋台を出し、年によっては16台もの山車が街を練り歩いた。第二次世界大戦以前まで続いていた。

一番 大 幡	橋 本 組
二番 笠 鉦	戸田甚太郎
三番 吉野合戦	設楽次郎右衛門
四番 義経都開	六沢屋久右衛門
五番 忠則歌道伝授	戸田惣兵衛
六番 玉とり	寺崎作右衛門
七番 八幡太郎弓勢之所	柴崎五郎八
八番 列国志之内	土屋作兵衛
九番 列国志之内	戸田安右御門
十番 石橋山合戦	二藤部兵右衛門

(明和7年(1770)「町寄合相談一件」町役場所蔵)

(4) 最上川に誘われ、大石田を訪れた文人墨客(『大石田町史 上・下巻』)

①大淀三千風(1639~1707)

貞享2年(1685)、談林派の俳人大淀三千風が全国行脚の途次、尾花沢に古友鈴木清風を尋ね、その足で最上川のほとり大石田を訪れている。

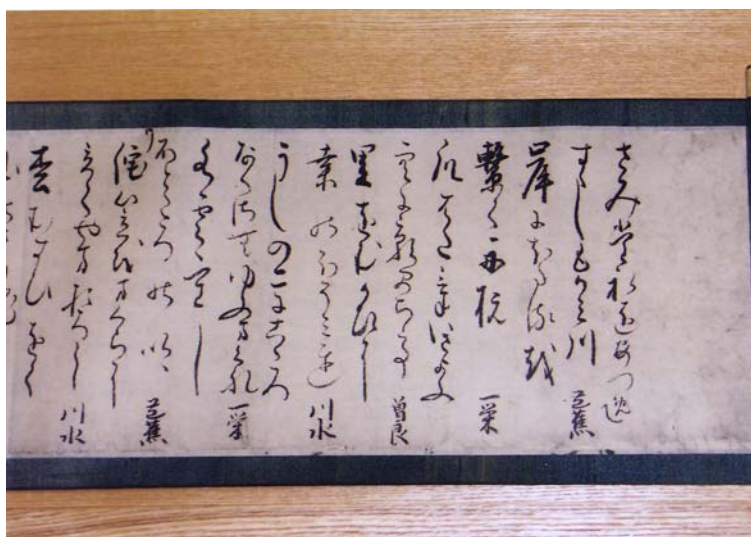
三千風と接したのは地元の俳人高野一栄と鷹巢の鈴木宗円である。特に一栄・宗円とは旧知の間柄であったことが記されている(『行脚文集』巻七)。

②松尾芭蕉（1644～94）

奥の細道行脚の途次、元禄2年5月28日から6月1日（陽暦7月14日～17日）まで、最上川をのぞむ高野一栄宅に3泊し、芭蕉、曾良と地元の俳人一栄、川水と4人で俳諧を興行し、四吟歌仙一卷を巻く。

五月雨をあつめて涼し最上川 芭蕉

歌仙「五月雨を」は、芭蕉自ら懐紙に認められたもので、県内唯一の芭蕉真蹟の歌仙であり、山形県の指定文化財として保存されている。また、明和年間大石田の美濃派の俳人土屋只狂（暁花園社主）によって芭蕉句碑が建立され、現在西光寺に所在する



【芭蕉真蹟の歌仙「さみだれを」】（大石田 佐藤里美氏所蔵）

③正岡子規（1867～1902）

伊予松山に生まれた正岡子規は、日本新聞社に入社すると同時に、新聞紙上などで芭蕉・蕪村を新しく見直した新派俳句を提唱し、大きな反響を呼んだ。芭蕉の出羽行脚を慕って仙台から関山峠を越え、明治26年8月7日大石田に一泊、次の句を残した。

ずんずんと夏を流すや最上川（昭和42年、乗船寺に句碑建立）

④齋藤茂吉（1882～1953）

上山市金瓶出身のアララギ派の歌人齋藤茂吉は、昭和21年2月1日、大石田の歌人二藤部兵右衛門と門弟板垣家子夫の招きに応じて上山を離れ、二藤部家の離屋に居を移す。ここを「聴禽書屋」と名付け作歌や短歌会を盛んに開いた。聴禽書屋は町立歴史民俗資料館の施設の一つとして活用されている。茂吉は最上川辺や近くの山々を散策し約850首の歌を残した。第十六歌集『白き山』に収められている。

約1年9カ月起居され、22年11月3日、帰京した。

最上川の上空にして残れるははいまだ美しき虹の断片（虹が丘の歌碑）

最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりけるかも（乗船寺の歌碑）



【最上川辺の茂吉】（大石田歴史民俗資料館蔵）

⑤金山平三（1883～1964）

近代日本画壇の重鎮、岡田三郎助が大正6年、雑誌「中央美術」に最上川近辺の写生地として大石田を紹介する。天下の画人たちは大石田を中心に最上川に引き寄せられる。

石井柏亭、中川一政をはじめ大家が多数訪れる。神戸出身の洋画家金山平三が大正12年初めて来町したのは、「最上川付近の写生地」を確認するためだった。町内を散策し、特に最上川辺に写生地を見つけ、昭和20年2月大石田の横山に夫婦で居を移し、大石田の住民として画業に取り組むことになる。特に、梨の花さく春景色や四季の最上川の風景を描き、数多くの秀作となる絵を残している。帰京後も大石田に住民票を置いていた。

⑥小松均（1902～1989）

小松均は明治35年（1902）、町内豊田の曹洞宗延命寺に生まれる。京都大原の里で60余年、山あいの懐に抱かれて自給自足の生活を営みながら、ひたすら自らの画業を磨くことに専念し、独自の線による水墨画の世界を築く。人生の後半、生まれ故郷の原風景最上川に回帰する。最上川の源流から下流まで「最上川シリーズ」の大作を残す。

（5）地元俳人と全国俳人たちとの交流

特に芭蕉来遊の江戸中期以降、庶民の文芸としての俳諧活動が盛んになり、18世紀末の安永・明和年間ごろになると、大石田・尾花沢・谷地・船町などにそれぞれ結社（連中）ができ、地元俳人が全国の俳人も入集した句集が京阪や江戸を版元にして編集・出版される。大石田の俳人たちは、芭蕉の流れをくむ美濃派の本拠地を訪れ、指導を得たり、逆に宗匠を招聘したりと盛んに交流が行われた。

- ・土屋只狂撰『もがみ川集』（明和6年） 版元、京二条：橘屋治兵衛
 - ・岡村好和他撰『俳諧 かさの日影』（安永6年）同
 - ・大石田社中編『追善 塚の花』（寛政7年） 同、江戸：廣井秀峨
- （『大石田町立歴史民俗資料館史料集第八集』）

第3章 「みなと文化」の保存と振興に関する地域の動き

1. 雛人形と雛祭りの復活

大石田町では、平成元年から3年間、雛人形研究家藤田順子氏に依頼し、主な旧家の雛調査を行った。その結果、京雛（寛永雛・享保雛・次郎左衛門雛他）・江戸雛（古今雛）が、旧船積荷問屋等に多く残されていることが分った。船荷人形櫃として日本海を渡り、酒田から最上川を上せ荷として運ばれたものである。藤田氏は大石田を「雛の隠れ里」と言う。

大石田の雛祭りはかなり古く、安永年間から行われていた記録が残っている。大石田の家の特徴的な建築様式として、東側に表から裏まで突き通るロウズ（通り土間）がある。ロウズに面して奥の間・中の間・茶の間と続くように作られている。雛をもつ町家では、居間や中の間あたりに雛を飾り、町の人々は「雛見せてけらっしゃい」といって、そのロウズから見せてもらう。旧暦三月節句は、一軒一軒の雛をロウズから見せてもらう雛祭りとして、伝統的に賑ったのが、河岸町大石田の雛まつりであった。それを平成13年から復活させた。

2. 「大石田河岸絵図」に表現された集落跡の保存

大石田には江戸後期に描かれたと思われる「大石田河岸絵図」（東町公民館所蔵）が残されている。その絵図は文化文政の頃を念頭に、最上川の舟場を含め大石田の河岸町部分全体を鳥瞰的に表現したものである。最上川と平行して走る大通りと町名や町割り、大通りに直交する南側の小路は荷揚げ道、北側の小路の奥には寺社が配置されるなどほぼ現在の原型をなしていることが分る。

建物の描写を見ると、寛政4年（1792）8月に設置された「川船方役所」と長屋、黒板塀で囲まれた重立ち衆の建物（名主、組頭、船主、荷問屋等の家々）も、その黒板塀と共に一部残っており、都市計画された江戸期の街並みの姿を留めている。

また、舟運時代を証言する建造物もいくつか残されている。店蔵・土蔵・主屋などで、江戸の影響のもとに成立し、東北において発展させた大石田の代表的な建築構造物、主屋の表通りから裏の最上川まで「ローズ」でつながる河岸場独特の建築構造、河岸絵図に画かれた黒板塀などである。しかし、年々それらの建築物がとり壊され、街並みが失せつつある。そこで、江戸期や明治期の住宅や土蔵などを町登録文化財に指定し、街並みの保存を図ろうとしている。現在、本町の高桑健太郎家住宅（建造物）を皮切りに、6軒を指定したが、今後も順次年次別指定に向けて取り組みをはじめている。



【街並み登録文化財「本町の高桑家住宅」】

3. 最上川景観の保存

本町は、最上川を中心とした豊かな自然景観と、最上川に誘われて多くの文人墨客が訪れた文化の香り高い町として自負している。最上川の豊かな自然景観を守り、誇りと愛着の持てる町づくりの一環として、自然景観保護条例を定め最上川のビューポイント3地点を「登録文化財」に指定している。

- ・第1地点「虹ヶ丘からの眺め」 空と山と川と田圃の絵になる風景
山形地域観光振興協議会「絵になる風景」選定
- ・第2地点「大浦小坂からの眺め」大パノラマの急展開する風景
- ・第3地点「川前観音堂からの眺め」雄大な自然に抱かれた最上川風景
山形県「最上川ビューポイント」選定

(『やまがた地域の絵になる風景』)

4. 最上川や街並みを鳥瞰した絵図の保存

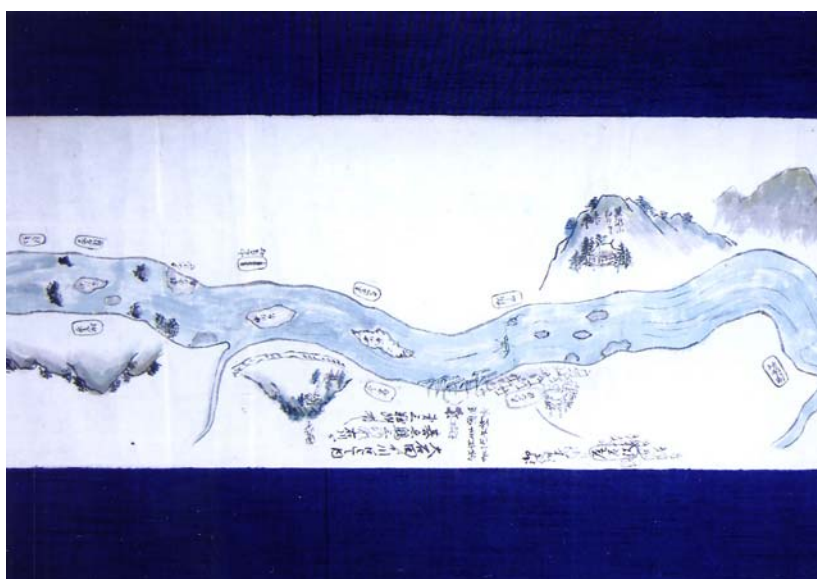
(1) 最上川通船案内書(卷子)

最上川通りに関する絵図は現在山形県において、11点発見されている。一本の川について画かれたものとしては国内最多と言われる。その内の一点がこの「最上川通船案内書」である。これは、尾花沢市行沢の石山松之助家(代々名主の家柄)より寄贈されたもので、

「最上川案内書旧キ付、行沢松之助三代之孫石山儀左衛門懇願二付、延沢新町八幡山金剛印儀弁法印写之 天保七年八月吉日」

と記されている。天保7年は、儀左衛門が義弁法印に書写させた年であるから原本はそれ以前のものである。作成年代は、絵図中の大石田に「最上川上下通船第一御取締所」と注記されている点から、川船方役所の設置された寛政4年(1792)以後と推測される。

上流の山形船町から下流の酒田まで、川の蛇行、中州の様子や、左右兩岸の村々、由緒ある寺社や橋跡などが簡略に描かれた写本である。川絵図にもられた自然的景観を歴史的な視点で見ることができ、その価値は高い(山形県の調査報告)。



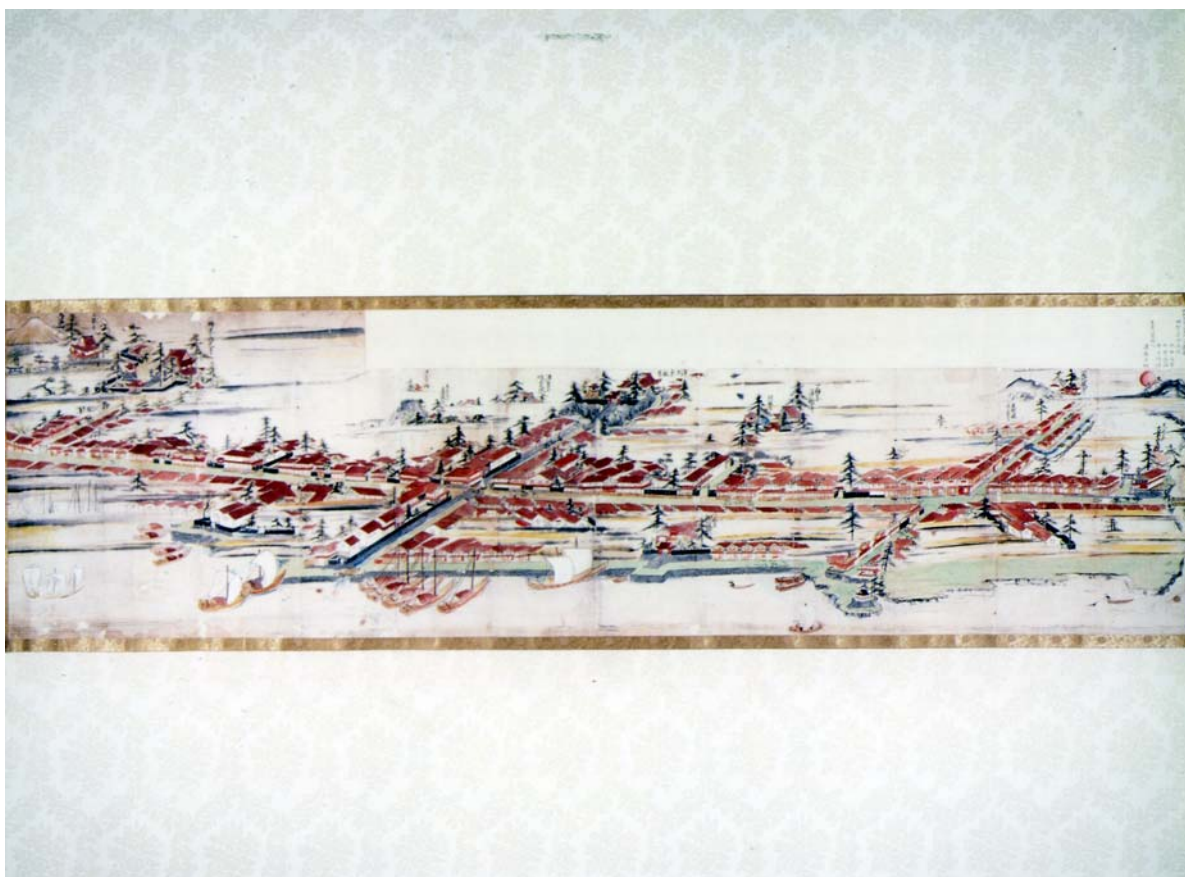
【最上川通船案内書(卷子)】(大石田歴史民俗資料館蔵)

(2) 紙本著色「大石田河岸絵図」江戸後期

大石田は、江戸期の最上川舟運の発達によってもたらされた代表的な河岸集落である。

この河岸絵図は江戸後期の大石田の姿を鳥瞰図として色彩を用いて描いたものである。最上川から眺めた当時の大石田町全体が画かれ、当時の町の姿を具体的に知り得る貴重な史料である。川に面して作られた全体の屋並・寺社、特に黒板塀に囲まれた有力者の住宅、荷問屋の荷蔵などが壮観に画かれている。現在の街並みと共通性が強く、街並み保存上の参考となるものである。

このような手法で画いた河岸絵図は全国的にも珍しいことから、現在佐倉市にある国立歴史民俗資料館にもこれを複製展示している（『最上川文化研究4』東北芸術工科大学研究報告書 関淳一稿）。



【大石田河岸絵図】（大石田東町公民館蔵）